

赤川

天野曉子



赤川

天野
暁子

ひまわり出版

〈著者紹介〉

天野暁子（あまの・あきこ）

東京教育大学教育学部特設教員養成部卒

山梨県立盲学校教諭

（現住所） 甲府市下飯田2丁目12-23

0093-998102-7427

赤 い 川

定価 1500円

検印省略

1981年3月20日 初版発行

著 者 天 野 暁 子

発 行 者 永 田 一 視

発 行 所 ひまわり出版株式会社

〒104 東京都中央区銀座7丁目12-9

日耐ビル2F

電話03-545-2750

発 売 元 株式会社 文 和 書 房

〒113 東京都文京区小石川3-1-3

電話03-813-6541(代)

印 刷 所 交 通 印 刷 株 式 有 限 公 司

目次

春の庭（第一部）	3
常盤ヶ丘のうた（第二部）	97
ロンリーランドの四季（第三部）	195
解説	298
石堂 秀夫	
あとがき	306

春
の
庭

真喜子は身動きもせず、もう何時間も川原の石に腰掛けて、水音に聞き入っていた。角ばった石のそれぞれの角を、何度もうくり返し丹念にまさぐりながら……このまま、また夏が過ぎて、秋がきて冬になる。年をとったらいったい自分は、どうなるのか。時どき東んちへくる、あの女の按摩さんのようになるのは嫌だ。その人は隣り町から、この村のある老人の所に引きとられてきた。だが、老人の娘たちから、大変きらわれているという噂だった。

ついひと月前、真喜子は、その人に会っていた。雨上がりの午後、往還べりの水たまりで遊んでいると、おっかなびっくり左右に杖を振りながら彼女がやってきた。きゃっととびのく子どもたちに腹を立てたのか、おつおついつて通り過ぎて行ったのを、真喜子たちはくすくす笑いながら真似た。だが、何故かその時の印象が、今になって淋しく心に思い返されるのだった。

峯吉も学校へ行くという。彼は『めくらを二人も生んだ』という理由で、出戻りになった母に連れられて祖父の家に厄介になっていた。だが、彼を溺愛するじいちゃんの真似ばかりして、言葉や動作もそっくりなので、いつしかじいちゃん坊やのニックネームが付いていた。

峯吉は真喜子と同様、よくラジオを聞いていた。だから、学校放送や物語りの放送、音楽コンクールなどの内容をよく知っており、二人は子どもたちの間である種の人気者だった。

例えば、真喜子がシンデレラの物語りを脚色して演じようといえば、峯吉はただちに場所や道具を提供してくれた。山羊をつないでおく鎖は、馬車の鈴の音になったし、両手のひらを濯ませて、よくとがらせた口元で打ち合わせれば、すてきな馬のひずめの音になった。穴をあけた貝が

ら、水を張ったコップ、ひっくり返したミルクの空罐。がらくたバンドの演奏には、何でも利用することができた。

その峯吉もついに学校へ行ってしまうのだ。真喜子だって学校に行きたい。いたこや按摩になんかならないで、ヘレンケラーのような勉強がしたい。

この水だって今はこんなに細い川で、橋の下や腐った木の間を流れているが、岩におつかったり、曲がりくねりながらも、いつかはやがて広い海にたどり着く。

ざらざら照りつける太陽も、うっとうしい油蟬の声も、ひとつの思いに沈む真喜子の心の底までは届かない。

「お姉ちゃん、お母さんが呼んでるよ」

妹の鏡子に呼びにこられて立ち上がったが、真喜子の頭の中は、遠い世界を歩いているような感覚だった。

「あのね……峯ちゃんも盲学校へ行くんだって」

その夜、みんなが寝しずまって、母が仕立物の内職を始めるのを待ちかねて真喜子はいった。

「おととい、峯ちゃんのお母さんが学校を見にいつてきたらしいわ」

「……」

「みんな学校に行くというのに、あたしだけが……」

胸がこみ上げてきそうになるのをこらえて、真喜子は母の返事を待った。しかし、じょきんと

布を切る裁ち鋏の音と、ぴちっと歯で糸を切る音以外は、何も聞こえてこない。

「いったい、あたしはどうなるの？」

ややあつて母はいった。

「もうちょっと待って」

「去年もそうだったわ」

「だってお父さんの病気がまだすっきりなおってないことは、あんたも知ってるでしょ」

「あたし、寄宿舎の費用が払えないんだったら家から学校に通うわ。一ヶ月の定期代は三百八十円だって、峯ちゃんがそういていた」

「洋服やカバンやその他の仕度だけでも四千円はかかるのよ」

だまっではいても、母はそれなりに調べていてくれたのだ。それを思うと、何だかすまないような気持にもなる。

「向うの駅から学校までは、バスで十分くらいっていったけど、あたしは歩いてバス代を節約してもいいのよ」

「もう、解ってるから」

母に強い語調でいわれると、真喜子は何もいえなくなる。仕方なく寝巻きに着替え、妹の脇にそっともぐり込んだ。いつまでも眠れない。溢れる涙が頬を伝い、枕元に落ちてくる。

八いつまでもこんな希望のない暮らしをするのはたまらないわ

泣きじゃくりを、聞かれまいと真喜子は布団をかぶった。それでも流れでてくる鼻汁を真喜子はどうすることもできない。

両親にしたところで、真喜子の入学を考えないはずはなかった。父親が病気で復員した貧しさはともかく、医者を訪ね、信仰に救いを求め、もしかして目が見えるようになるのではないかという望みを捨て切れなかった日々。戦後の混雑する電車で盲目の娘を一人乗せて学校に通わせる……そのことにためらいを感じて、ついつい延期してきたのだ。

目が覚めると、もうご飯の湯気が匂い、味噌汁の煮えた気配がただよっている。母はとくに起きていたらしい。母はゆうべも遅くまで仕立物をしていた。ほんとにすまないと思う。しみりしそうになるのをこらえて、だからこそ頑張らなければと真喜子は、元気にはね起きた。兄や妹たちを起こさぬよう、忍び足で、いそいそと仕度をした。

春雨に煙る井戸端で顔を洗い、沈丁花の香りとともに新鮮な山の朝の空気を、精いっぱい吸いこんだ。真新しいワンピースを身につけ、足にぴったりの運動靴をはいた。これまでの上っぱりとモンペの世界とは、何と違った心地よさだろう。

さあ、いよいよ出発だ。長いこと懂れて待っていた入学式なのだ。半里の山道も何でもない。往復四時間が何の苦労か。弟を背負って付きそってきける母の負担を、一日も早く軽くしてやりたい。そう思って真喜子はできるだけ一人で歩こうと努めた。

最初の難所は、往還を下り始めてすぐの、くぼ、えといわれる家の前の溜池だった。右側通行で川のふちに杖を当て、すべらせて行けばいいは安全なのだが、ところどころ落ちこむ箇所が道路の方にせりだしているのだ。その最初が溜池だった。杖を前に出して左右に振り子のように動かすことが、どうしても惨めに思えていやなのだ。だからその側までくると、勢い足元が覚束なくなつて、つい足でさぐるようになってしまふ。そう見せないようにゆっくり大股で歩いてみて、結局は厄なっかしく見えるのに……

次は肥料小屋の前である。そこは急に穴になつてはいないが、もし滑つたりすれば真喜子の肩まで埋つてしまふ。川が深い滝のようになった所だった。しかし、そこはごうごうと鳴る川音が高かつたから、何とか無事に通過できそうだ。

そして、三番目が西山橋と呼ばれる手すりのない橋である。誰かが一緒の時か、人の足音について行ける時はよいが、雨音が高く傘で反響したり、自動車にであつたりしたら大変だ。往きは道路の延長で橋を渡れるが、帰りは直角に曲つてその橋にこなければならない。

それから幾つかの難所を越えた最後が踏み切りであつた。警報機も遮断機もない。だからどんなに急いでいても、電車の音を少しでも聞いたら渡つてはいけなないと、真喜子は母にいいきかされていた。

新しい服を着て新しい靴をはいて、しかも電車に乗つて、遠くにでかけるなんて、何年ぶりのことだったろう。それを浮き浮きと手ばなしで喜べないのが残念だった。次は幾つ目の何という

駅か、いちいち母が教えてくれるのをしっかり頭に焼き付けなければならない。

電車は往きだけで約一時間かかった。下車して改札をでると五百歩、真っすぐ歩いてそれから右に曲って、三百歩行くと交差点があると母は教える。だが子どもが毎日そんなことばかり考えて歩けるだろうか。母は戸惑っているようだった。それを試すようなつもりで母は真喜子にいった。

「お母さん、スリッパ買って行くから、先に一人で行ってなさい。すぐ追い付くからね。まっすぐ歩いてゆくのよ」

真喜子は最初どうしようかとためらった。だが、勇気をだして一人で、すっすっと歩いて行った。そうして家並の切れる所にくると、ちょっと立ち止まった。それから前の交差点すら難なく越えて行った。

どうしてそれが解ったのか。希望の光りを見たように弾んだ声で母が尋ねると、真喜子は事もなげに笑って答えた。

「だって顔の前が何だか広くなって、いろんな音が変わるんだもの」

おお、そうだった。真喜子には耳もあるし鼻もあるし、せん細な皮膚の感覚だってあるのだ。それなら道に凸凹の多い山里よりは、はるかに町の方が安全ではなかったか。

こうして真喜子は煩わしい歩数の勘定から、パン屋の匂い、八百屋の匂い、精米所の音へと、その道しるべの感覚を伸ばして行ったのだった。

押さえられてきた知識欲が、一時に花開いたように、夢見るような学校の生活が始まった。

十歳。ほんとなら小学校五年の年齢である。その年になって、真喜子は初めて盲学校の小学部一年に入学したのだ。

もう今までのように、兄や妹たちが学校へ行ってしまった後、ずっと弟を負い続けていなくてもいい。聞きあきた東んちのおばあさんの物語りに、あくびをかみ殺さなくてもすむ。沢山本を読んで歌も歌えるのだ。運動会や学芸会にも参加できるのだ。

学校に着くと、五、六人の上級生らしい人が、昇降口に寄り合って何か親しそうに話をしていた。真喜子たちに気が付くと、親切に教えてくれた。

「一年生ね、一番最初の教室よ」

盲人といえば真喜子は、峯吉と東んちへくる按摩さんしか知らなかった。そんな真喜子にとって、盲人は何かうじうじした印象だった。しかし、いま声を掛けてくれた人は利口で快活そうな感じがした。

すっかり嬉しくなった真喜子は、早くその人と親しくなって、いろいろな事を教えてもらいたいと思った。

入学式も無事すんで、いよいよここだと示された教室に入っていった。何とそれは小さな部屋だろう。まるで、真喜子たち疎開者の仮住まいの、十畳間よりちょっと広い程度でしかないのだ。

ある。しかも同級生は八人。それでも小学部では一番大勢のクラスだった。もっともこの学校は、小学部の六クラス、中学部の三クラス、高等部理療科（はり・きゅう・按摩科）全部合わせた生徒が九十五人だという。真喜子がかつて遊びに行った鏡子の学校とは、較べものにならないほど小規模なのだ。

そして机の並び方までが変っている。まるで四角いドーナツのようだ。真喜子の席は部屋の西側である。黒板を背にした先生から、一番遠い角だった。他に女の子は二人いたが、真喜子の隣りは十五歳、十七歳という、大きな男の子だったので、つい気後れ勝ちになって神妙にしていた。「お机をふきましようね」

可愛い声の都会風な女の子がまわってきた。真喜子と同じ年頃らしいが、臆する様子もなく、母親から手渡される雑巾を次々に受けとって、次々と机をふいていく。そんな様子に真喜子はまづ驚いてしまった。それがすむと彼女は、明るい声でいった。

「この花きれいでしょ、先生にあげます」

甘い花の香りが部屋の中に漂う。

その子の名は齊藤星子。先生から一番近い席だった。真喜子はへまだ自己紹介もすんでいないのにVと、いやな感じがした。毎朝きりきり舞いで家の用事をすませ、弟を負った母に連れられてくる真喜子は、学校の時間に間に合うだけで精いっぱいである。星子のようにそんな所まで気を配る余裕はない。勉強で頑張って先生に認めてもらうほかはないと、真喜子は秘かに決意し

た。

挨拶がすむと先生は出席をとった。生まれて初めてまともに自分の名を呼ばれる。それは病院の待合室や、予防注射を受けた時に名前を呼ばれたのとはまったく違う。真喜子自身に向かって、まっすぐとんでくる声だ。真喜子は感動しながらきっぱりと「はい」と答えた。中には蚊の鳴くような返事や腑抜けのような答えもあった。一年とはいっても、いずれも遅れて入学した生徒だったから恥かしかったのだろう。それを聞いた先生は男のようない方をした。

「なにかい、あんたたちはみんな風邪っ引きなの」

四十過ぎらしい女の先生だったが、非常に厳しそうな声だった。

その教室の隅の台には、真喜子の手のひらほどもありそうな、木で作ったソラマメや、ふくろの剣製はぐせなどが、三日おきくらいに品を代えてそっと置かれている。先生は何もいわず、生徒たちが何気なく触れ、尋ね、感心する様子を満足気にだまって見ていた。

文字というのがまた驚きである。点字という言葉はそれまでも聞いたことがあった。だが、いま見せられたそれは、想像とは全く違って、蚕の卵の塊りのような感じだった。兄や鏡子が、画用紙に千枚通しでぼつぼつ穴をあけて、教えてくれた数字や平がな。疑いもなくそれが点字と思っていたのに、まったく違うのだ。皆におはじきを配りながら先生はいった。

「縦に三つ、横に二つとおはじきをおいてごらん、それが点字で『め』という字、その並べ方でいろんな字ができるわけ」

左の上にたった一つぼつんとあれば、それが「あ」という文字。真喜子たちは盲学校にきて、最初に『め』という字を習い、降る雨、食べる飴の綴りをおぼえていった。そして毎日毎日、キヤメル大の大きさに切られた厚紙に、習った文字を書いて、十枚ずつ小さな紙袋に入れて持ち帰った。その中の字を使って好きな物の名前を綴るのが宿題だった。

歩行訓練も厳しかった。真喜子たちは雨が降ろうが、風が吹こうが、何の手掛かりもない校庭の隅の井戸まで、当番制で給食の食器を洗いに行くことを命じられた。あまり左に行き過ぎて、三、四年生が作っていたせかくの花壇をめっちゃめっちゃにしてしまったり、右により過ぎて小使室の角におつかって瘤をつくったりもした。だが、先生は窓から、「もっと右、もっと左」と声をかけるだけだった。

廊下の隅に腰掛けを並べたコーナーから、そんな様子を見ている付き添いの父母たちの中には生徒が可愛想だとか、あまり厳しすぎるとか非難する者もいた。けれども、その厳しさのおかげで、真喜子たちはみな生き生きとした動きができるようになった。

そんな基礎的な生活訓練が一段落すると、意欲的な先生は、筆算が困難な盲児たちに、徹底してそろばんによる計算法を教えこんだ。そろばんというのは、商店で使うような大きな珠の下半分が切れていて、上下には動くが、触ったくらいでは転がってしまわないように工夫されたものと、将棋のこまのようなものを寄せていくそろばんの二種であった。

「みんなは年をくってるから、来年は超級（学年を飛ばして進級すること）できるように、その分